



大阪公立大学共同出版会

No.30

NEWSLETTER

ニュースレター

Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

目 次

| | | |
|--------------------------|-------|---|
| • OMUP理事長 新年のご挨拶 | 足立 泰二 | 1 |
| • OMUP新春インタビュー | | |
| 大阪府立大学生命環境科学研究所長 増田 昇教授 | | |
| インタビュアー：常務理事 足立 泰二 | | 2 |
| • 「著者が語る 第30回OMUPサロン」の報告 | | 3 |
| • 自著を語る (12) | | |
| 平成26年度 大阪市立大学優秀テキスト賞受賞 | | |
| 生物学実験への招待 | | |
| 大阪市立大学基礎生物学実験テキスト | | 4 |
| • 自著を語る (13) | | |
| 熱統計力学 | 石井 廣湖 | 5 |
| • 自著を語る (14) | | |
| 英語の冠詞と<数>の仕組みがわかる指導 | | |
| —入門期に導入する認知文法の視点— | | |
| 岸本 映子 | | 5 |
| • 賞受賞作品と内容紹介 | | |
| 2014年日本土地環境学会学術賞受賞 | | |
| 「不動産価格バブルは回避できる」 | | 6 |
| 第17回日本自費出版文化賞個人誌部門受賞 | | |
| 「足跡一小股千佐／平林豊子の思い出と仕事—」 | | 8 |
| • 大阪公立大学共同出版会事務局より | | 8 |
| • 編集後記 | | 8 |

OMUP理事長 新年のご挨拶



OMUP理事長 足立 泰二

明けましておめでとうございます。
2015年 元旦

NPO法人大阪公立大学共同出版会（OMUP）会員の皆様には健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

年頭に当たり皆様にご祝辞と抱負を申し上げられることを誠に嬉しく存じます。もちろん、内外の経済・政治状況の厳しいなか、私ども出版に携わるものとしても安閑としている状態ではありません。

さて、本年はOMUPにとって記念すべき節目の年であります。2001年、新ミレニアム（千年紀）のスタートと共に、大阪南部大和川を跨ぐ当時の公立大学5ユニット、すなわち大阪市立大学、大阪府立大学、府立大阪女子大学、大阪府立

看護大学ならびに大阪府立医療技術短期大学部を構成する教授陣を中心に自主的個人参加で設立した学術出版会として、今年が15周年の記念すべき年であります。設立当初は任意団体として、創立後6年目からは特定非営利活動法人として認証され、構成大学以外の会員も増え、順調な展開を遂げてきています。出版書籍点数もすでに100を超えるまでに至っています。

さらに、OMUPは、数ある国内大学の学術出版会のなかでも特徴ある存在です。つまり、①特定大学の「冠出版会」ではなく、複数大学の教員が横ならび、リベラルな個人参加で切磋琢磨していること、②国内唯一のNPO法人出版会として、構成会員の学術研究成果の公表を積極支援していること、③出版グローバル化のなか、着実に、多言語対応を進めていること、などです。これらはひとえに会員各位の志の高さを物語るものであり、皆様の事業協力の賜物であります。OMUPのこの特徴は今後も一層強化することをお誓い申し上げます。

ところで、上述のように、本年は創立15周年を記念して、各種イベントを計画中です。出版は文化を支える社会貢献であります。どうか、会員皆様からの忌憚のないご意見を承ることができれば幸いです。

新年に当たり、心新たにOMUP設立の原点に立ち返り、身を引き締めて次なるステップアップに精進致したく存じます。今後とも何卒よろしくご愛顧のほどをお願いして、新年のご挨拶と致します。

敬白

OMUP新春インタビュー

大阪府立大学生命環境科学研究科長

増田 昇 教授

インタビュアー 大阪公立大学共同出版会理事長 足立 泰二



増田 昇 研究科長

大阪府立大学生命環境科学研究科の新たな展開とは

足立理事長：あけましておめでとうございます。新年にあたりまして、まず、大阪府立大学生命環境科学研究科長としての先生の本年のご抱負をお伺いできればと存じます。

増田研究科長：研究科に対しては大きくふたつあります。生命環境科学研究科の今後の抱負ですが、まず一つ目は、去年の3月に整備の遅れていました植物バイオサイエンス課程と緑地環境科学類がB11棟へ引っ越ししてきました。これで、研究科として教育研究環境の改善がなされ、基盤が一定整った去年は節目の年でもありました。もともと府立大学の生命環境科学研究科が持っていた蓄積というものは、教育研究フィールド（農場）と研究科学技術を持ちながら、植物の栽培学をベースにした農学という強い側面がありました。農学研究科から生命環境科学研究科という名前に変わり、ゲノムや分子生物学等へ急速に展開して、そのことで新たな研究領域が確立できた一方で、栽培学をベースにした植物個体、成体レベルをつかう研究が少し脆弱になった側面も否めません。かつての農学としての領域の強化や充実を図る必要性があるのではないかと考えています。特に大学再編の中で、都市部にある大学の特徴として、食を基調とした農学と環境を基調とした緑地としての寄与をきっちりと議論をして、研究科の柱を構築していく必要性があるのではないかと思っています。もう一つは、研究科

全体としてですが、りんくうキャンパスと中百舌鳥キャンパスに学類や専攻が点在し、お互い距離があるというデメリットが生まれています。それで学類や専攻、従来までの研究領域を超えた若手の共同研究を奨励しました。今までの学問領域を超えて学際的に異分野が交流することによって次の展開の目出しができないかと考えており、今年も含め将来に向けて強化していきたいと思っています。

オンリーワンでの地方創生に貢献を

足立（以下敬称略）：先生の分野の環境あるいは地域作り、地方創生というようなお話を伺いたいですね。

増田：今までの都市インフラは、どちらかというと物流や人の移動、エネルギーの供給など動脈型のインフラが議論されてきました。それに対して静脈型ともいえる水と緑をベースとしたインフラを考えていかないと都市は持続しません。なぜなら動脈型というのは都市機能同士を繋げることによって効率性を高めようとしてきたものです。基本的に都市は、人間の生命を維持する為のすべての消費拠点であって生産拠点ではありません。都市の背景にある自然地域が食料、水、酸素を供給し、極端なことをいってエネルギーも供給しています。そうすると消費拠点同士を繋げて効率性を高めるのでは都市は持続しなくて、供給拠点であります自然地域と都市地域をどう繋げていくのか、それがグリーン・インフラだと思います。したがって静脈型のインフラのベースは河川水路で、それをネットワークさせますと海から山まで繋がった消費と供給とのバランスが取れるような形になります。この辺りをどのように政策の中に位置づけていくのかが大きな課題だと思いますし、私の使命かと思っています。また、河川や流域をベースに地域文化が形成され、それがその地域の再生や創生に繋がっていくといつても良いと思います。流域をベースとしました地域創生の中で特にいえることは、ナンバーワンよりむしろ地域の風土を基調としましたオンリーワンを考えていかないといけないと思います。差を認め合い認識するというオンリーワンの政策、それがまさに地域創生の政策なのです。

個の最大化より全体の最適化を志向する環境システムと捉える

足立：そう致しますと、大学もある意味そのような静脈型インフラの多様性をいかに統合させるか、ということになりますか。

増田：いかにその差を認めあうか、つまり異質性（ヘテロ）を我々が認識し容認するという社会構造が、今後求められる大きな多様性を保有するということだと思います。その意味でも大学の運営にもオンリーワン的な考え方が必要だと思います。特に公立大学は地域貢献等がベースになりますから、ナンバーワンよりオンリーワンをどう展開してい

くのか、公立大学としての府立大学が持っている強みをどのように発揮していくのか、その辺りの議論が必要だと思います。環境倫理は研究倫理に相通じるところがあり、個の最大化より全体の最適化の中で個の最大化や最適化が保障されます。それがまさに環境システム学の大きな意味です。地域を支える大学の文化的貢献ということになりますでしょうか。

出版、もう一つの文化的地域貢献を

足立：貴重なお考えを聞かせて頂きました。実は2015年は弊会発足15周年になります。任意団体でスタートし、6年目にしてNPO法人になりました。今、先生からお聞きしたこととも関連して、出版文化のあり方など更にお考えをお聞かせ下さい。

増田：私の思うに、本や文字媒体の持つ意味というのは、ひとつは全体像を見るのに必要な媒体ですよね。もうひとつは自分の欲しい情報に行きつく手前で周辺のページを見ますよね。これはデジタルにはない重要な点だと思っています。こういった紙を媒体とした出版物の重要性を堅持し続けて頂きたいですね。それと近年地域づくりでよく自助、共助、公助といわれます。公助よりも自由度や多様性を担保している共助、あるいは互助という仕組みの中で出版活動をOMUPはされています。これも是非とも堅持してもらいたいと思います。共助とか互助の仕組みを作るためには、多様な人々が一堂に会して議論できるプラットホームが必要です。多様な大学が参画しているこの出版会はまさに研究や教育のプラットホームとしての機能を持っていると思いますので、これからも大きく発展していって頂きたいと思います。

足立：ありがとうございます。最近は大学にとっても出版の重要性を認識頂きつつあるのか、校費を使ったり、学部長・学長裁量経費の決済でサポートして頂けたりするような形になってきています。OMUPの宣伝になりますが、日本語はもちろんですが、英語だけにとどまらずmulti-linguals、例えばフランス語でフランスの大学出版会と共同で出版致しましたし、広く世界に販路を持つシュプリンガーとのオンデマンド出版も致しました。

増田：日本の考え方を地域レベルから次に展開させるためには、globalで理解できる言語への転換が必要だと思います。我々自身がglobalな情報発信力を持つことは、重要な意味であると思います。大阪府立大学並びに大阪市立大学の学術的な地域貢献に、更なる発展を願うものです。

足立：長時間にわたり、大変示唆に富んだお話をありがとうございます。また、貴職におかれまして、一層のご尽力をお願い致しますと共に、若い後進の皆様に大いに刺激を与えて頂けますようお願い致します。

「著者が語る 第30回OMUPサロン」の報告

第30回OMUPサロンが2014年9月15日（月・祝）午後4時から、ジュンク堂書店難波店3階カウンター前特設会場にて開催されました。

演者は本年5月にOMUPから『横井小楠の学問と思想』を出版された本山幸彦氏で、「『横井小楠の学問と思想』余話」というタイトルで約1時間、横井小楠の人物像を中心に熱くお話しされました。聞き手はOMUP副理事長の小股憲明氏でしたが、小股氏いわく対談形式で臨んだところ、恩師である本山先生から話す内容は決まると事前に告げられたそうで、あたかも独演会の様相となりました。

今回のサロンもJUNKU難波トークセッションとの共催でしたが、次々と会場に押し掛ける教え子さんたちに、ジュンク堂書店の担当者も「こんなに来られるとは！」と椅子の補充に追われながら驚きを隠せませんでした。

30回の節目となるサロンでしたが、大盛況でとても思い出深いサロンとなりました。今後とも内容を充実させOMUPサロンは開催してまいりますので、ニュースレター読者の皆様、ご期待いただくとともにぜひご参加いただきますようお願い申し上げます。
(文責：金井一弘)



OMUPサロンでの本山幸彦氏



OMUPサロン当日の様子

自著を語る（12）

平成26年度 大阪市立大学優秀テキスト賞受賞

生物学実験への招待



大阪市立大学理学部生物学科 編

ISBN978-4-907209-17-9 C3045
B5判、並製本、254頁
定価：本体価格2,000円+税

「実験教育の理想と現実」

大阪市立大学理学部生物学科

大阪市立大学は8つの学部を持つ総合大学である。学生定員は1学年あたり1500名弱、うち4割を理工医系学生が占める。多くの学生は1・2年次のうちに、進級に必要な単位として、あるいは教職課程の一部として、自然科学系の実験科目を受講する。これらの実験教育のほとんどは杉本キャンパス内の基礎教育実験棟で実施されている。本学もご多分に洩れず学生定員の増加と予算削減のなか、学生1人あたりの実習経費は貨幣価値もふまえると三十数年で3分の1に激減し、さらに人件費の抑圧で人員の取り回しも難しさを増しており、実験教育の質の維持は重い課題となっている。

本書の生まれたきっかけは、履修者の急増をうける形で教職向けの生物学実験を新たに立ち上げたことに始まる。コンパクトな1週間の集中開講としたため、オムニバスで担当する各教員の指導用プリントをひとつに綴じて、冊子にすることとした。せっかくの機会なのできちんと本にしてはという声があがり出版の検討を始めたが、一般書にするには網羅性が必要ということで、基礎教育実験棟で行われる生物学実験3科目の内容をすべて盛り込むことになった。本書の内容の大半は、実際の授業で各教員の配布してきた指導用プリントを雑形にしたものと思って頂いて良い。

当初は一般向けの参考書とする計画だったが、最終的には大阪市立大学での授業に用いる指定教科書へと編集方針を転換した。その理由を正直に申し上げれば通常提供していない実習テーマにまで手を広げる余力が無かつたためだが、図らずも一般読者むけには一大学の授業の状況のわかる資料として興味をそそる所があるかもしれない。

本書は既存の実習用教科書にくらべ、いくつか風変わりなところがある。いずれもOMUPからのご提案やご配慮がなければ実現できなかったものである。以下、これらの特徴を紹介しつつ、われわれの実際の授業現場でもつ意味を述べたい。

まず、本が4種類もある。内訳は、一般読者・教員用の全科目掲載版1種類と、学生向けの各科目分冊版3種類である。分冊版の存在はまず学生の持ち歩きの負担に配慮したためであるが、一方でどれかひとつの科目しか受講しない学生も多数いるという、カリキュラムの複雑さに対応する意味もある。このことは実験メニュー同士の関連づけや掲載順を制約することとなり、編集上の心残りとなっている。

つぎに、外観である。分冊版は（印刷・書店の手をわざわせる）リング綴じ製本である。実験中に手が汚れたり片手が塞がっていてもページを繰りやすく、至極便利である。実は近年、本学の実験教室は完全に満員状態で、実験機器を充実するほど狭くなるというジレンマに置かれている。1人1台ずつ顕微鏡を使えば机はもう満杯、ビーカーやシャーレは机からこぼれ落ちんばかりある。しかしリング綴じのおかげで本を折り畳んで安全に実験できる。

ページを開くと、いくつかの提出課題は様式にそった書き込み式で、目打ち線で剥ぎ取れるようになっている。課題用紙を誌面に組み込んだのは確実に教科書を持参させる意味が大きい。しかし一方で、本の一部への書き込みを前提にしたことで、多くの学生は自身の観察記録も本の余白等に書き込みがちかもしれない。近ごろ、実験ノートの役割が問われる出来事もあり、本書の体裁が教育上最善かどうかは注視が必要と考えている。

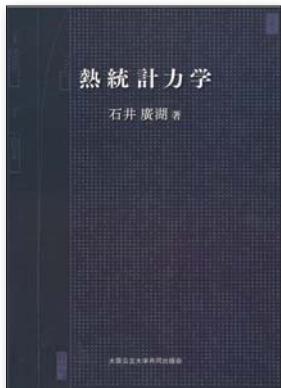
ともあれ、今年度からすべての実習指導をプリントから教科書中心へ転換することで、今更ながら予習を前提とした指導を行いやすくなった。しかし学生が、勉強しやすくなったり歓迎してくれるかといえば、必ずしも良い顔をしない。やはり教科書代は懐具合に響くようである。実際、プリントの方が良いという声も聞こえるが、お値段は類書に比べかなり勉強できたということで勘弁してもらっている。

入学間もない学生にとって本書が授業の出発点になるのと同様、われわれも本書によって実験教育の新しいステージに立つことができた。今後の課題は、われわれ自身が本書に安住することなく、新しいテーマの創案や指導方法の開発を心がけ、再び本書の内容へと還元することであろう。学科一同、先輩諸氏からのご指導ご鞭撻を賜りたい所存である。

（文責：大阪市立大学理学部 水野寿朗）

自著を語る（13）

熱統計力学



石井 廣湖

ISBN978-4-907209-31-5 C3042
B5判、並製本、270頁
定価：本体価格2,000円+税

私は長年、大阪市立大学理学部で熱統計力学の講義を担当していました。本書はその講義ノートをまとめ物理系の学部・大学院向けの教科書・参考書として出版したものです。熱統計力学は力学や電磁気学とともに物理の根幹をなし、物理を学ぶ上で必須の基礎科目です。特に膨大な数の原子でできた物質系では統計力学は基盤であり、物性物理学など多くの分野の出発点になっています。

熱統計力学は、熱の起源を原子レベルのミクロな世界の運動に求めます。そうすることで「高温・低温にある2物体を接触させたとき、熱は高温側から低温側へ流れ2物体は同じ温度になる」という日常当たり前の事実を、確率的に確かな事象として理解します。逆に「等温の2物体がひとりでに一方は高温に他方は低温になる」ようなことは確率的に決して起こらないことも分かります。これを熱の不可逆性と言います。確率が登場するのは、肉眼で見えるマクロな物体は膨大な数の原子から成るため統計的にしか扱えないためです。熱統計力学はマクロな物質をミクロな視点から見る物性物理の基盤になっています。

物性物理学の理論は私の専門分野ですから、熱統計力学の講義は自分の研究の基礎を語ることでもありました。授業は図やグラフ、文字の定義、式の変形などを、黒板中を所狭しと書き下すスタイルで行い、学生たちはノートを懸命にとりながら集中して受講してくれました。数式の計算から結果が導かれると、その物理的意味をわかりやすい言葉で言い表したり、既知の系との類似点や相違点を比べながら説明したりするなど、学生が理解しやすいように心がけてきました。また観測量の時間平均が取りうる状態についての統計平均に接近する様子をPCの画面上で観察できるように、気体分子運動のシミュレーションプログラムを考案し、授業中にデモンストレーションを行うなど、自分なりにいろいろ工夫もしました。

本書はこの授業をもとに作られたので、本文の中に、また数式の展開の個所など随所に、授業の雰囲気が現れているのではないかと思います。

当時のことを思い起こすと、この授業はどの年も毎年意欲

的な受講生で盛況だったことが印象的です。そのなかには、物理や関連分野の研究者や専門家として現在活躍されている方も多くいます。

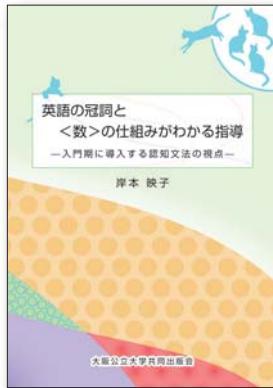
本書の構成は次の通りです。第1章で熱の不可逆性の程度を表す「エントロピー」という量を導入します。第2章、第3章では、このエントロピーが、ミクロには取りうる状態数の対数で与えられるということ（ボルツマンの原理）をシミュレーションの助けを借りて説明します。ここは特に本書のオリジナルな個所です。取りうる状態はすべて均等に取るという等重率の原理のもとで、不可逆過程ではエントロピーが増大することが自明なことになります。その後、第7章までは平衡状態の統計力学、第8章から第10章は2次相転移、ブラウン運動、線型応答の久保公式などアドバンストコースの内容です。ここでは読者のさらなる興味をかき立てることができますと願っています。第8章ではスピニ系のシミュレーションを行い、2次相転移の特徴を説明しています。（第2章と第8章のシミュレーションの実行ファイルやアルゴリズムなどは、大阪市大・学情センターのリポジトリからダウンロードして、読者がシミュレーションを試行することができます。）

本書が多くの読者に読まれ、熱統計力学の理解のお役に立つことができればと願ってやみません。（なお、本書の図を含め索引まで全てのページのpdfファイルはLaTeXを用いて自作したものです。）

自著を語る（14）

英語の冠詞と<数>の仕組みがわかる指導 —入門期に導入する認知文法の視点—

岸本 映子



ISBN978-4-907209-30-8 C3082
A5判、並製本、319頁
定価：本体価格2,700円+税

『英語の冠詞と<数>の仕組みがわかる指導』の本を平成26年の初夏に出版しました。ジャンルは英語教育、認知言語学の本です。内容は英語の冠詞と文法的<数>をどのように指導すればよいのか、というテーマで前半は理論編、後半が応用編の構成です。今回は著者がこの本を書くに至った状況、問題意識など取り巻く状況を述べてみたいと思います。

まずテーマに関してです。英語の冠詞や<数>は英語教育では「地味な」テーマと感じられることが多い、このような学術本にはあまり多くの読者は望めないと思っています。し

かし、このテーマは英語を知るうえで、非常に重要で根本的です。特に日本語を母語に持つ学習者が、英語を中学、高校、大学で10年間勉強しても、冠詞の運用はなかなか身につかないことが指摘されていますが、その理由は名詞の冠詞と＜数＞を概念的に関連させて把握できていないからだと仮定し、その解決策をこの本で提示しています。

日本語を母語に持つ学習者の状況を考えます。日本語の場合、冠詞や＜数＞の表現は義務的ではないし、訳する場合は日本語に表現しない方が自然となります。このような言語環境においては冠詞と＜数＞を概念レベルから、体系的に可視化して指導できる方法が必要であると痛感し、これを模索しました。現在、中学校の英語では文法配列の教科書を使って、英語の単数形1時間、次に複数形1時間程度の指導で、次々と他の文法事項に移動します。中学校1年の2学期に一般動詞の三人称単数現在形の-(e)sが導入されるあたりで、学習者の半分から3分の1が「英語がわからなくなつた」と言います。私は中学での英語の指導の経験が長いのですが、これは毎年そうです。なぜでしょうか。これは、冠詞や＜数＞に体系づけられた名詞の概念がしっかりと定着しないままになっていることに起因すると思われます。名詞は冠詞と＜数＞と深く体系的に関連しているのですが、このことがわからないと、どのような名詞が一般動詞の現在形を支配するかもわからないと思います。学習者は「三人称単数」と口では言っても、では何が三人称単数であるのかしっかりと理解していない場合が多い。その結果、動詞に-sを付与するのかどうかの判断がつきにくくなります。

次に話は母語話者の可算性の問題に移ります。英語学習者用の英和辞書には名詞の前に「C」(countable) や「U」(uncountable) の文字が書いてあります。これはこの名詞が可算名詞か不可算名詞かの分類を示しています。たとえば、appleを見れば、「リンゴ」という意味で「C」ですが、その隣に「リンゴの果肉」の意味では「U」となっています。このような分類を見ると可算性について学習者は混乱します。なぜなら、対象のもの(名詞)

には決まった可算性があると学習したからです。実際、学習者は授業中に「homeworkは可算名詞ですか」のような類いの質問をするのはこの理由からです。ところが英語を母語とする国、たとえばアメリカでは小学校低学年や幼稚園児を対象とする辞書にもこのような可算性の表示はまったくありません。小さいときから英語に多くの頻度で遭遇しているので、可算・不可算の分類はすべて頭に入っているのだろうと思っていました。

ちがいました。調べてわかったことですが、実はほとんどすべての英語の名詞は話し手の認識によって、可算にも不可算にもなるのです。だから、話し手は対象の認識の仕方によって、可算性を選択し、冠詞と結びつけて語を運用します。この本では日本語を母語とする学習者にもそのような選択ができる視点の導入方法を構築し、提示しています。

冠詞は不定冠詞(a), ゼロ冠詞(Φ), 定冠詞(the) の3種類があります。不定冠詞については中学校の文法で指導しますが、ゼロ冠詞は見えないので文法項目には記載されず、正確に指導されていない場合が多いです。しかし、実際はゼロ冠詞の機能がわからないと不定冠詞の特質もわからないのです。また定冠詞を不定冠詞と関連させて指導されることが多く、最初に出てきた語は不定冠詞を伴い、その語が2度目以降出でてくれば定冠詞を伴うと指導されることが一般的です。これは基礎的な定冠詞の特質が欠如した説明です。不定冠詞とゼロ冠詞は人間の対象認識を反映したものですが、定冠詞は認識の問題ではなく、場の問題なのです。つまり、話し手と聞き手に指示対象が同定できるかどうかです。ここまで読んで、このテーマに興味を持たれた方は是非この本をご一読ください。おもしろいです。

出版に際し、校正をしていただいた中村様には本当にいろいろ貴重なご指摘をいただき感謝しております。この本の内容を著者よりよく理解いただいたように思います。この本でのテーマをさらに発展させ、現在はその動画教材を科学研究費助成事業により作成中です。また出版でお世話になるかもしれません。日本語を客観的に振り返ることができる、英語教育の発展にわずかでも寄与できればうれしいです。

賞受賞作品と内容紹介

不動産価格バブルは回避できる —不動産価格形成の本質を踏まえて—



建部 好治 著

ISBN978-4-907209-11-7 C3033
A5判、並製本、362頁
定価：本体価格3,500円+税

2014年日本土地環境学会学術賞受賞

最初に本書の内容を紹介すると、理論編と実証編、補論編とに大別できる。

理論編では、1 経済の目的とシステム、2 一般商品価格、3 土地価格、4 住宅価格と「基準」の具体的手法、5 比準価額、積算価額及び収益価額の具体的な求め方、6 「土地価格比準表」の背後にある「地代論」、7 資本等の循環過程、8 企業活動及び人間生活における付加価値、9 資本主義と産業資本・商業資本・貸付資本等信用構造の立体的形成（マクロ）、10 信用市場における利子率・利回りとリスク、が論述されている。

実証編では、1日本の不動産価額のバブル景気とその崩壊後の失われた20年、2米国の住宅価額バブルとその崩壊、3不動産価額変動と不動産業界、4事業用・居住用不動産の購入可能倍率と購入可能額の事例研究、と続いている。

補論編は会計的側面から1不動産価格に対する需要者側の捉え方としての財務分析、2資産除去債務とゼロミッション(原発問題を含めて)、で構成されている。

本書では、不動産価格を理解するうえで、基礎的な理解を必要とする以下の内容説明があり、読者が段階的に理解を得られるよう工夫されている。第1は、「一般商品価値」と「一般商品価格」の相違点である。著者は、価値が市場で貨幣現象として現れたものが価格であると規定している。土地価格についてはさらに詳細に、一般商品価格との比較において、その類似点と相違点を整理し、「価格諸原則」として端的に理論展開をしている。

第2に、土地価格理論化の骨子である「擬制資本」についての論述がある。概略は、人間の土地に対する投資行為が利子を生み、即ち、地代が生み出されるが故に、ストック価格としての土地価格が形成されるのである。これをわかりやすく銀行預金に例えて、元本を預け入ると一定の期間に応じて、利子率に基づいた利子が得られる。このようなことが繰り返し行われると、本来、元本があつて利子が生まれるという順序が逆転して、定期的に利子を生みだす対象としての元本が先行する。ここにバーチャルな資本価格が成立するという具体例であり、地球の一部分である土地になぜ価格が付くかという根源的な問い合わせに対して非常にわかりやすく述べられている。

そして、最も着目すべき本書の特徴は、不動産価格バブルが発生する根本的な原因についての解明である。

一言すると、人間の投資が及ばない土地の上空間つまり空、または地下に及び、一見、人間が支配できていると見えていくところにまで「期待利益」を仮想し、投機的対象とするところに原因があると述べている。さらに、これらをより具体的に解明する方法として、「不動産の正常価格」を位置付け、不動産価格形成の要因を以下の3つの視点から分析、理論化したのである。ここに本書の真価を見出すことができる。

第1には「不動産鑑定評価基準」を分析し、これに基づき「不動産の正常価格」は「収益価格」であるという視点である。これについては、鑑定評価の実務的な指導内容も盛り込まれているが、ポイントは収益還元法による「収益価格」が「不動産の正常価格」であるということである。この中で、特に興味深いことは、鑑定評価の実務上の手引きである「土地価格比準表」における理論的裏付けとしての「地代論」である。著者は、K・マルクスの差額地代論に基づき、時代にマッチ

した用途的地域別地代論を新たに位置づけ、工業地・住宅地・商業地の地代発生要素を具体的に提示することによって、21世紀の差額地代論を展開している。

第2に「資本等の循環過程」を分析し、ここから創造される「付加価値」を財務諸表上の勘定科目で具体化したことである。「付加価値の創造」として生産、流通、金融の各過程を流れとして図式化し、純付加価値及び粗付加価値の構成要素とそれらが生まれる過程についての論述がある。事業地については、粗付加価値が不動産取得の購入財源を構成し、住宅地においては、年収又は可処分所得が購入財源である。これらと地価の関連性を財務諸表上の勘定科目で捉え、さらに実証編でデータ確認をした。その結果、粗付加価値と地価の乖離、年収又は可処分所得と地価の乖離こそがバブル現象であることを明らかにしたのである。

第3に、資本主義は発展しながら各過程を分化してきているという運動の法則に基づき、「信用制度」の分析により、不動産購入の資金を提供する「信用」にとっての安定的返済資源確保の観点から「不動産の正常価格」をみたものである。それは、資本主義経済が成熟してくると、企業は「資金余剰」の傾向が強く、加えて証券信用の発展がある。即ち、間接金融から直接金融へと向かう中で膨大なバブルを発生させる原因があると論じている。

ここで改めて、本書の冒頭「経済の目的とシステム」に戻ると、著者には、「生態系主主義」(エコクラシイ)へのゆるぎない理念があり、そこには、地球上に存在する全ての生命体に対する限りない慈愛と敬意の念が満ち溢れている。従って、著者は政策主体がこの現象を早期に発見し、打開策を打つことによって「不動産価格バブルは回避できる」と提言している。その背景には、不動産バブルがもたらす、経済的混乱、社会的混乱のみならず自然環境的破壊に至っては、短期的影響に留まらず、子孫にまで多くの悪影響を及ぼすという切迫した危機感がある。

ここで本書の課題に触れると、バブルが招いた自然環境破壊については前著「土地価格形成論」第1部実証編第Ⅱ章信用制度の構造の実態pp28~pp33に、多様な視点から具体的な数値によりその影響力が述べられているが、本稿にこれらが記述されていないのは、残念ではある。

これらの哲学的基盤のもと、「人間の経済活動」と「自然環境」との関わりについて「不動産価格形成分析」を通して問題提起がなされており、そもそも「土地所有権とは何か」という根源的な問題にまでテーマを投げかけている。

ゆえに、この研究は「社会科学の真の意義」を示唆する貴重な必読の書であると考える。

(文責:大阪市立大学大学院創造都市研究科 院生 小堂朋美)

第17回日本自費出版文化賞個人誌部門受賞

足跡 —小股千佐／平林豊子の思い出と仕事—

小股 憲明・小股 小枝 編



ISBN978-4-90149-85-8 C0095

A4判、並製本、568頁

定価：本体価格3,000円+税

本書は2007年に発症したガンのため、2009年に享年34歳で永眠した私どもの長女、小股千佐（ペンネームは平林豊子）の追悼のために没後2年の命日に発行いたしました。詮無いことを悔やむのを「死んだ児の年を数える」と言いますが、生きていれば今年39歳になります。

没後の遺品整理の中で、生前にはまったく知らなかった作品が多数出てきました。Mixi日記も読むこととなりました。これらを一書にまとめて、彼女が生きた証として残してやりたいと考えました。本書に収めた仕事を見ると、世過ぎのためにいろいろな仕事をこなしつつも、社会的な関心を持ち続けており、将来の可能性の片鱗が窺えるように思えます。親の欲目かも知れませんが、あと10年、20年生きていれば、社会的なテーマにも切り込むことができるライターになれたのではないかと残念です。

本書は大学出版会にはそぐわないのですが、12年前の立ち上げから理事として運営に関わっている関係上、親ばかの我が儘で出版をお願いしました。刊行直後から、大阪公立大

学共同出版会のHPで、本書の全文が無料で読めるようになっています。ちょっと覗いてみて頂ければ嬉しく思います。

本書の編纂に献身的に協力して頂いた故人の仕事仲間「地球の歩き方」編集部高島正人さん、フリーライターで、ライターズネットワーク幹事の長尾枝さん、デザイナーの阿部大輔さんのお蔭でたいへんクオリティの高い仕上りとなり、深く感謝しています。

無名のライターの追悼本であり、社会的に出版の意味がどれほどあるかは、はなはだ疑問でしたが、ただただ娘の思い出とわずかな仕事を記録として残したいという勝手な思いから作ったものでした。そのような次第ですので、知人の勧めに従って応募はしたものの、まさかこのような賞を頂けることになるとは思ってもいませんでした。過ぎたる賞をお与えいただいた主催者、選考委員の皆さんに篤くお礼申し上げます。娘へのいいプレゼントとなりました。有り難うございました。

(授賞式小股憲明スピーチ抜粋)

大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学および大阪府立大学における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加を得て、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社において採算上刊行を引き受けないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
 - (2) 会員の学術図書の刊行頒布
 - (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
 - (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業
- などを行っているNPO法人です。参加を希望される方は、下記事務局へお問い合わせください。

〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1

大阪府立大学中もずキャンパス内

NPO法人大阪公立大学共同出版会(OMUP)事務局

電話：072-251-6533 フaxシミリ：072-254-9539

e-mail：omup@hs.osakafu-u.ac.jp

URL：<http://www.omup.jp/>

入会金：一口一万円（終身会費）

振込先：三菱東京UFJ銀行 中もず支店 普通 3976510

編集後記

明けましておめでとうございます。昨年度は弊会から出版されたご著書から3つの作品が賞を受賞されました。それぞれの作品について紹介の文章を掲載しておりますので是非御覧ください。これからも地道な努力を継続し皆様のお役に立てるよう頑張る所存です。引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。

(N.K.)



表彰式にて